

文筆家の日記・書簡に見られる関東大震災の記憶

神永 亜季

本研究は、1923年9月1日発生の関東大震災の記録について、経年変化とその契機を探るものである。

関東大震災の記録に関する研究は、引用元となった記録が書かれた時期については検討しておらず、経年変化を知ることができない。そこで本研究では、関東大震災の日記・書簡における記録内容を「記憶」と定義し、その比較を行うことによって、文筆家個人の「記憶」の経年変化を追う。さらに、明らかになった個人の経年変化を他の文筆家と比較し、各文筆家に共通する経年変化の要因を探ることとした。

調査方法は、関東大震災が発生した1923年9月1日以降に執筆された4人の文筆家の日記・書簡の記述内容を「意識」「抽象意識」の2つに分類し、経年変化と変化の契機となる事象を探る文献調査とした。記述内容の分類における「意識」とは、直接関東大震災について言及している「記憶」を指す。次に「抽象意識」とは、関東大震災への言及をしながらも、抽象的な観点から地震一般に言及している「記憶」を指す。また本研究では、寺田寅彦、永井荷風、野上弥生子、室生犀星の4人の文筆家を扱い、日記・書簡の補完として同文筆家の随筆なども扱う。

調査結果から、各文筆家に共通する「記憶」の経年変化についてまとめると、4人の文筆家の震災に関する「記憶」は同じ流れで変化していくことが分かった。震災当初の1923年9月は「意識」に分類される「記憶」であり、数か月後に「抽象意識」として考えがまとまる。一度「抽象意識」としてまとまった後は震災に関する記録頻度が落ちていき、震災の「記憶」が全くなくなる例もあれば、数年に一度の頻度で記述する文筆家の例もある。その後、気象条件や他人との会話、地震を含む災害やテレビ番組等の特定の条件で、震災に関する「記憶」のない年が続いた中でも突然震災の「記憶」が記述される例がある。また、1つの日記・書簡の中で「意識」に分類される「記憶」が教訓論(震災を自身や社会への教訓とする考え方)を経て「抽象意識」に転換する箇所が存在し、各文筆家の持論とも関係が見られた。

以上から、文筆家における「記憶」の経年変化は存在し、その変化の要因は気象条件や他人との会話が共通している。また、教訓論を経た抽象的な「記憶」は各文筆家の持論に影響を与えていることが明らかになった。

本研究の課題としては、対象が一部の限られた社会的階層の人間であり、サンプル数が少ないことである。今後は一般人の記録を対象とした調査を行っていきたいと考えている。

(指導教員 後藤嘉宏)